

—————
 卷 頭 言
 —————

「Impact Factor」を高めるために

杉 田 利 男



最近刊行された海老沢泰久氏の「美味礼讃」（文藝春秋刊）はフランス料理研究家 辻 静雄氏の半生を小説風に画いた名作と思われませんが、その文中に、一万軒以上のフランスのレストランの案内書である「ミシュラン」における店の評価について、著名な料理研究家であるMITの教授が、

「最高は三ツ星で、わざわざ出かけて行くだけの値打ちのある店、二ツ星は回り道をしても行ってみるとよい店、一ツ星はおいしい店という基準になっているのだが、彼らが今年三ツ星をつけた店は全部で十軒、二ツ星は六十五軒だ。まずこの七十五軒の店は行ってみる必要があると思うね」

「一ツ星の店というのは何軒ぐらいあるんですか？」

「さあ、わたしは数えてみたことはないが、五百軒ぐらいだろう」

「これは権威のあるものなんですか」

「それはどうか知らないが、わたしはそれまで二ツ星だったレストランが一ツ星に落ちたのを悲観して、ピストル自殺をした主人を知っているよ」

と主人公に教えてくれる情景が記されています。

このレストランの三ツ星、二ツ星の評価を研究論文誌にあてはめてみますと「Impact Factor」になるのではないのでしょうか。この指数は、ある雑誌が過去2年間に発表した論文の総数(A)に対する、それらの発表論文の被引用回数(B)の割合、すなわち (B/A) で、この数値の高い雑誌ほど影響力の高い論文が収録されているわけです。1992年での表面関係の雑誌では、

Phys. Rev. Lett. 8.213, Appl. Phys. Lett. 4.059, Surface Sci. 2.917, J. Vac. Sci.

Technol. (B) 2.613, 同 (A) 1.917, Thin Solid Films 1.144, Appl. Surface Sci. 1.097,

のごとくであります。

本誌「表面科学」は和文誌なので、この Impact Factor は付与されていませんが、“国内的な” Impact Factor は、きっと付与されているでしょう。それは、本誌には和文原著論文が掲載され、その論文が Dr. 論文の構成論文になりうるであろうからであります。本誌の Impact Factor を高めるには、適正な査読のついた良質の論文が数多く掲載されるべきであります。また、年間12冊発行されて雑誌としての自立が必要です。現在、理事会は12冊化の実現に努力されていますが、けっこうなことでもあります。

将来、“国際的”な Impact Factor の付与されることが望ましいのはもちろんであります。これには、本号のような研究論文特集号を英文で発行するとか、他の国際誌と共同発行するなどが考えられます。この後者も理事会で話題になっていることは好ましい方向であります。

いずれにせよ、本会会員が一致して、本誌に良質の論文を投稿し、発表いたしましょう。そして、編集委員会、理事会はそれを受け、共に本誌の Impact Factor を高めるのに努力しようではありませんか。

(東京理科大学 工学部)